

さて最後に、この学習の特長としまして、この指導はどなたにでも容易に出来て、どなたがおやりになっても成功する、といふことを申しあげたいと思ひます。この指導には、何の技術も練習もありません。ただ漢字を幼児の目に触れるやうに掲示することです。従来漢字は幼児にはむづかしすぎるものとして、幼児が「これ、なあに？」とたづねても、「これはあなたにはむづかしいものなの」と言つて、幼児からこれを遠ざけてみたものを、反対に、幼児の目に触れるやうにし、幼児の関心を漢字に導くことです。

目に触れるものすべて覚えずにはゐられない幼児は、これに関心をもつたとたんその漢字を覚えてしまひます。覚えないとすれば、それはその漢字に幼児が関心をもつてゐないからです。従つて、よくあることですが、「これだけ教へたのにまだ覚えぬのか」といふ指導者の態度は、石井方式では厳禁いたしてゐます。漢字は教へたから覚えるものではありません。幼児がそれに関心をもちさへすればすぐにも覚えますが、関心を示さない限り、何回教へやうと覚えるものではありません。従つて、「これでもう十回めだ、まだ覚えぬのか」と言つて子供を責めるのは間違つてゐます。教へるのが教師の務めであるなら、覚え

るまで教へるのが教師の務めといふものでせう。

子供を責めるよりも、環境にさへ工夫を働かせるなら、幼児は驚くほど簡単に漢字を覚えるものです。小学校に入学するまでに、一千字の漢字が読めるやうになることは極めて容易であります。文部省の調査によりますと、小学校を卒業した子供たちの平均して読める漢字の字数は五百字にも満たない、といふことであります。これは、子供たちに能力がないためではなくて、学ぶべき時期を失したからであります。最も記憶力の旺盛な幼児期おうせいにこれを与へるならば、だれでも、これを容易に身につけて、小学校に入学した時には、楽しんで、文字の学習よりも文章の内容を追求する、さういふ学習に進められるだらう、と私は考へてゐます。現在、中学校や高校で、漢字の書取り練習を盛んにしてゐますが、さういふ学習は小学校で、それも低学年のうちに大半を修了させるやうでなければならぬ、このやうに私は考へて居ります。

もっと申しあげたいことがございますが、今日はこれで終らせていただきます。